

日本人英語学習者の英語リスニングにおける イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語・ カナダ英語の発音のバリエーションによる影響

内田翔大¹

要旨

現在、英語は国際共通語としての役割を果たしている言語であり世界中で話されている。母語話者だけでなく第二言語としての話者も含めると世界での話者の数は相当な数となる。それと同時に使用される国ごとの英語のバリエーションのかなり大きいと言える。本研究ではその中でも、中心的な英語使用国であるイギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダの英語の発音のバリエーションに注目して、日本人英語学習者のリスニングに与える各国の英語発音の影響を実験的に検証した。問題の難易度やナレーターの個人差の影響をなるべく少なくするために、各国2名ずつ、計8名のナレーターによる英文音声を用いて内容理解テストを実施した。その結果、内容理解テストの成績はカナダ英語のみが他の3か国の英語よりも高いという結果となった。この結果は、日本人英語学習者が英語のリスニングを行う際に、英語のバリエーションによって聞き取りやすさには差があることを示しており、今後の日本における英語教育にも応用できるものであった。

1 背景

現在、英語は世界中の人々によって話され、国際語としての地位を築いている。多くの国で第二外国語として学習され、国際連合をはじめとした多くの国際的な組織や機関で主として話される言語も英語である。異なる国の企業間でのやり取りや、異なる言語を母語とする旅行者同士がコミュニケーションをとるための言語も英語であり、英語は国際共通語（リンガ・フランカ、リングワ・フランカ、Lingua Franca）としての役割を果たしていると言える。WorldAtlas（2018）によると、およそ3億6千万人の人が母語として英語を話しており、およそ10億人の人が第二言語として英語を話しているとされる。国連の統計調査（United Nations, 2019）において2019年での世界の人口がおよそ78億人であることを考えると、世界の人口のおよそ5.7人に1人が英語を話すことになる。また別の調査では、英語の話者は20億人にも及ぶとされているものもあり、この割合は3.9人に1人

¹ 和洋女子大学国際学部英語コミュニケーション学科
Department of English Communication, Faculty of Global Studies, Wayo Women's University

まで増加する（本名、2002）。このように英語は世界中の多くの人々によって話されているので、そのバリエーションもかなり大きく、単一の言語としての英語ではなく、世界には複数の英語があるという認識が広まり、「世界英語」（World Englishes）という名称で呼ばれ、研究されている（Melchers et al., 2019 など）。このようになり話者の多い英語であるが、Kachru (1985)は、世界の英語を3つのグループ（The three circles of Englishes）に分けて考えている。もっとも中心のグループであるインナーサークル（Inner Circle）にはイギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなど、多くの国民が英語を母語とする国の英語が属し、次いで外側のグループであるアウターサークル（Outer Circle）にはインド、シンガポールなど、かつてイギリスの植民地であり、公用語や第二言語として英語が話されている国の英語が、最も外側のグループであるエクспанディングサークル（Expanding Circle）には日本、中国、イタリアなど外国語として英語が使用されている国の英語が属するとしている。ほとんどの国民が英語を母語として使用しているインナーサークルの英語に着目しても、そのバリエーションはさまざまである。各国はそれぞれの「標準」とされる英語を持ち、辞書や学校教育などによって「標準語」を規定している。各国の英語は「イギリス英語」や「アメリカ英語」など区別され、それらは発音・語彙・スペリング・文法などの点で違いがある。

このように世界各地で英語が話されている現在、日本人学習者が英語を学習し、多くの人とコミュニケーションをとることのできる力を身に着けるためには、多様なバリエーションの英語を正確に聞き取るリスニング力が不可欠である。実際に、日本で受験者の多い英語の検定試験の一つである TOEIC テストのリスニング音声は、イギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダの4か国の英語の割合が均等になるようにナレーターを割り当てている（Educational Testing Service, 2019）。しかし一方で、Tara et al. (2010)でも指摘されているように、日本の中学や高校で扱われている英語教科書の音声は大半がアメリカ英語の発音のものとなっており、日本人英語学習者はアメリカ英語に偏った英語教育を受けていると言える。イギリス、オーストラリア、カナダなど、その他のインナーサークルの国の英語に触れる機会は、アメリカ英語に触れる機会に比べてかなり少ない現状がある。日本人英語学習者が、これらインナーサークル属する各国の英語のリスニングにおいて、どの程度国による英語のバリエーションの違いの影響を受けるのかということをはっきりさせることは、日本の英語教育においても非常に有用であると考えられるが、このような研究は少ない。

先に挙げた Tara et al. (2010)の研究では、日本人英語学習者が、イギリスの容認発音（RP, Received Pronunciation）の話者の英語と、ヒンディー語母語話者の英語による短い英語の質問文を聞き、4つの選択肢から適切な答えを選ぶ形式の内容理解テスト（多肢選択問題）を実施した。その結果、学習者の英語力の差に関係なく、イギリス容認発音話者の音声を

用いた問題の正答率が、ヒンディー語母語話者の音声を用いた問題の正答率よりも高いことが示された。しかしこの実験は英語母語話者の英語音声と、非母語話者の英語音声とを比較したものであり、母語話者の英語音声の方が非母語話者の英語音声よりも内容を理解しやすいという結果は、当たり前の結果と考えられる。

インナーサークルに属する英語母語話者の音声同士を比べた研究としては、大木&金子 (2014) がある。この研究では、日本人英語学習者のイギリス英語とアメリカ英語の音声に対する内容理解の度合いに差があるかを検証するため、TOEIC テストの公式問題集 (Educational Testing Service, 2009) の Part 3 と Part 4 の問題からイギリス英語とアメリカ英語で話された問題を 4 題ずつ抜粋し、内容に関する 3 択の内容理解テスト (多肢選択問題) を実施した。この研究では、同時に被験者に各英文の英語がどの程度聞き取りやすいかという感覚的評価についても 5 段階評価の調査も行っており、こちらの評価ではアメリカ英語の方がイギリス英語よりも聞き取りやすいという結果であったものの、内容理解テストの成績ではイギリス英語とアメリカ英語の間に得点の差は見られなかった。ただし、この調査では、一つの公式問題集から抜粋したイギリス英語とアメリカ英語のナレーターの音声を使用していることから、被験者はイギリス英語とアメリカ英語で異なる問題を解いていることとなる。TOEIC テストの問題は、実施回ごとの難易度を均等にするように作られているというよりは、むしろ各実施回の問題毎にある程度難易度の差が出てしまうことは許容したうえで、難易度を調整した評価基準でスコアを算出するようにしている。これは TOEIC テストの公式ホームページである国際ビジネスコミュニケーション協会 (2020) にも、「TOEIC L&R の試験問題は公開テストごとに新しい問題が作成されていますが、毎回のテスト毎に評価基準にズレがでないように「Equating」と呼ばれる難易度の調整が行われています」と記載されていることから読み取れる。その点を考慮すると、イギリス英語とアメリカ英語で異なる問題を使用した場合、各英語間で生じた差や、差が生じなかったという結果は、問題間の難易度の差が原因となってしまう可能性を排除できない。加えて、基本的に一つの問題集ではナレーターは各国一名ずつが収録している。イギリス英語、アメリカ英語ともに一人のナレーターの発話音声を用いられている場合、いくらプロのナレーターの音声を使用しているとしても、ナレーターごとの発話の癖や聞き取りやすさなど、個人差の結果への影響も排除しきれない。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では、なるべく問題による難易度の差やナレーターの個人差の影響を解消したうえで、各国の標準とされる英語の発音のバリエーションが、日本人英語学習者のリスニングに及ぼす影響を検証する。また、大木&金子 (2014) で比較されているイギリス英語とアメリカ英語に加えて、同じくインナーサークルに属する英語で、TOEIC テストの音声にも使用されているオーストラリア英語とカナダ英語も加えた 4 か国の英語を比較する。

2 実験

2-1 被験者

実験には和洋女子大学国際学部（2年生以上は人文学部国際学科）に所属する1～4年生の、計73名がボランティアで参加した。参加した学生は全員日本語母語話者の女性である。

2-2 実験刺激

今回の実験に用いた問題は、『公式 TOEIC Listening & Reading トレーニング リスニング編』（Educational Testing Service, 2017）と『An Amazing Approach to the TOEIC L&R Test』（萩ら、2019）から、以下の（1）のような TOEIC テストの Part 2 の問題を計 32 問抜粋し使用した。問題の形式は、短い英語の発話があり、それに対して 3 択の選択肢から最も適切な返答を選ぶ多肢選択問題である。3 択の選択肢もそのまま使用した。

(1) How do I get to the home appliances section?

- (A) You can't use gift certificates at the food court.
- (B) Yes, I'm finished with the laundry.
- (C) The easiest way is to take the escalator by the cashier.

実際の TOEIC テストでは、問題文も（A）～（C）の選択肢も全て音声で流れるが、本実験では最初の短い発話のみが音声で流れ、（A）～（C）の選択肢は音声では流さず、解答画面に記載されているものを読んで選ぶ形式とした。問題ごとの難易度の差が結果に影響しないようにするために、4つのリストを作成した。4つのリストはそれぞれ32問の各問題をイギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダの異なるナレーターによって均等に読まれるようにし、各リストでイギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダの音声は8問ずつになるように設定した。例えば、第1問はリスト1ではイギリス英語、リスト2ではアメリカ英語、リスト3ではオーストラリア英語、リスト4ではカナダ英語となり、第2問はリスト1ではアメリカ英語、リスト2ではオーストラリア英語、リスト3ではカナダ英語、リスト4ではイギリス英語となるような感じである。ただし、各リストで各国の音声は規則的な順番に出てこないよう、ランダムに順番を調整した。各被験者は一つの問題に対しては1か国の音声しか聞くことなく、4つのリストを合わせると32問全てでイギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語・カナダ英語の4か国のデータが取れる

実験デザインとした。

今回の実験では、大木&金子（2014）の実験方法を参考にしつつも、ナレーターによる個人差をなるべく少なくするため、TOEIC テストの公式問題集などの音声を利用するのではなく、新たに各国のナレーターを用意し録音を行った。各ナレーターは各母国に在住しており、日本国内のナレーション会社に登録しているプロのナレーターに有償で録音を依頼した。ナレーター本人へのアンケートで、その国の標準的とされる英語を話し特に方言を話さないということを確認したうえで、別の英語のネイティブスピーカーによってその国の標準的な英語話者であることが確認できたナレーターのみを採用した。イギリス英語については、地域方言のほかに、属する社会階級や家柄による社会方言もバリエーションが大きく存在するため、イギリス人のネイティブスピーカーによる判断で、「容認発音（RP）を話し、別の社会方言や地域方言を感じない英語である」と判断されたナレーターを採用した。また、いくらプロのナレーターで、各国の標準的な英語話者であるとはいえ、ある程度ナレーターごとの話し方の癖や聞き取りやすさなどの個人差は避けられないため、少しでも個人差を少なくする目的で各国 2 名ずつのナレーターを利用した。また、男女で聞きやすさに違いが生じることも考えられたため、イギリス・アメリカ・オーストラリアの 3 か国の音声は男女各 1 名ずつのナレーターを用意したが、カナダ英語に関してはナレーター確保の関係で男性しか用意できず、男性のナレーター 2 名の音声となっている。各ナレーターには実際の TOEIC テストと同じスピードで問題音声を発話するように依頼し、実際に TOEIC テストに近いスピードで録音がされていることを確認している。また、各国 2 名のナレーターが問題文の半数ずつを担当し、ランダムに配置した。この結果、各被験者は 32 問の問題に対して 4 か国 8 人のナレーターの音声をランダムに聞く形となり、実験の意図が被験者に分かってしまうリスクは極めて低くなったと考える。音声の編集に際しては NCH Software 社の WavePad というソフトウェアを使用し、問題音声作成時に問題の説明音声や、各ナレーターの問題文の音声均一な音量となるように音声を編集している。

2-3 実験方法・手順

本実験は、Google Form を利用して行った。被験者は最初に練習問題を含む実験の説明の文章を読み解答の手順について理解したうえで実験を開始してもらった。32 問の実験文の音声は 1 度だけ聞いてもらい、解答を開始したら音声を停止したり、戻したりはしないで最後まで解答を続けるように複数回指示を行った。実験音声は一つの問題音声が流れるごとに次の問題音声が流れるまで 15 秒間のブランクが空いており、その間に 3 択の多

肢選択問題の設問を読んで一つに解答するように指示した。説明音声を含めた音声は 12 分程度である。被験者の募集は 2020 年度後期に和洋女子大学で行われた複数の英語系の授業内で行った。授業の内容には直接関係しないものなので、完全な任意による参加をお願いしたが、各リストへの参加者がある程度均一にするため、募集を行った授業や学生の学年や学籍番号に応じて協力してくれる場合の参加リストを振り分けた。この結果、どのリストも同数の参加者とはならなかったが、リスト 1~3 には各 17 名の参加者が、リスト 4 には 22 名の参加者が集まった。

2-4 採点と分析

今回の実験では正答率によって被験者や項目のデータを除外しなかった。各被験者について、それぞれ 32 問の問題の解答を正答か不正答かの二択でコーディングした。データの分析には統計ソフトの R を用いて、一般化線形混合モデル (Generalized Linear Mixed Effect Models, GLME models) を用いて行った (Baayen et al., 2008 など)。一般化線形混合モデルのモデリングには、各問題の被験者の解答 (正答/不正答) を固定要因 (fixed effect) とし、被験者と実験刺激をランダム要因 (random effects) とした。最適モデル (The best-fit model) の選定にはバックワードセレクションアプローチ (backward stepwise selection approach) を行い、最大モデル (the maximum structure) は、ランダム要因である被験者と実験刺激の両方の固定要因への影響を加味したランダム切片と傾きを含むものとしている。この分析は、いずれかの条件を基準条件として定め、その基準条件と他条件との比較を行うものとなるため、今回はイギリス英語の条件を基準条件と定め分析を行った。また、一般化線形混合モデルを行った後の各条件間での多重比較に関しては、R の "lsmeans" パッケージを用いている (R, 2018)。

2-5 予想

大木&金子 (2014) の研究ではイギリス英語とアメリカ英語の間に成績の差が見られなかったが、これは問題の難易度の差やナレーター個人の差が原因となっている可能性も避けられないとして、本実験ではそれらの可能性を極力少なくするデザインで実験を行った。よって本実験ではイギリス英語とアメリカ英語の間に差がみられる可能性は十分にあると予測される。差の方向性としては、Tara et al. (2010) で日本人英語学習者の学習経験はかなりアメリカ英語に偏っていることが指摘されていることから、今までの学習で多く聞いてきたアメリカ英語の方がイギリス英語に比べて聞き取りやすく成績が高いことが予想される。カナダ英語の発音は、東京外国語大学言語モジュール (2014) によると、「カナダ英語は、アメリカ英語と同じに聞こえ、イギリス英語とオーストラリア英語とはかなり

発音が異なる」とあることから、アメリカ英語とほとんど同じような結果になることが予想される。一方で、オーストラリア英語は中谷（2004）によると「現在のオーストラリア英語は18世紀のロンドン・アクセントにもとづいており、コックニーの話し方と似ています。」(p.52)とあることから、イギリスの社会方言で労働者階級の発音であるコックニーに近い部分があることがわかる。コックニーアクセントの発音はかなり特徴的で学習者には聞き取りづらいことで有名なため、オーストラリア英語の正答率は他の3か国の英語に比べて成績が低くなることが予想される。これらをまとめると、アメリカ英語とカナダ英語が最も成績が良く、次いでイギリス英語、最も成績が悪いのがオーストラリア英語になると予想する。

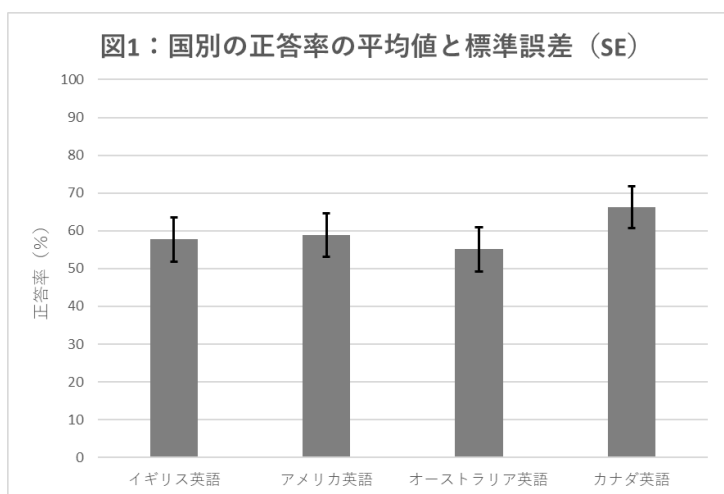
3 結果と考察

3-1 結論

被験者 73 名の各 32 問の解答の平均正答率 (M) は 60.0% (SD=14.0, MIN=25.0%, MAX=94.0%) だった。以下の表 1、図 1 は実験音声の英語の国別の記述統計である。

表 1：国別の正答率の記述統計 (N=73)

	イギリス	アメリカ	オーストラリア	カナダ
平均 (M)	57.71%	58.90%	55.14%	66.27%
標準偏差 (SD)	49.45	49.24	49.78	47.32
標準誤差 (SE)	5.83	5.80	5.87	5.58



イギリス英語の条件を基準条件 (baseline) とし、各国の正答率を固定要因として一般化線形混合モデルでの分析を行ったところ、イギリス英語の正答率 (M=57.71%) はカナダ英語の正答率 (M=66.27%) よりも有意に低かった ($z=3.40$, $p<.001$)。一方で、イギリス英語の正答率とアメリカ英語の正答率 (M=58.90%, $z=0.53$, $p=.59$) やオーストラリア英語の正答率 (M=55.14%, $z=-0.75$, $P=.45$) の間には有意な差は確認できなかった。なお、一般化線形混合モデルでの分析において、バックワードセレクションでモデル間の有意な差はなかったため、最適モデル (the best logit mixed-factors model) には被験者や実験刺激のランダム要因の傾きを含まないモデルを採用した (Jaeger, 2008)。この分析で得られた最適モデルを統計ソフト R の "lsmeans" パッケージを利用して多重比較を行った結果が以下の表 2 である。

表 2 : 国別の正答率の多重比較の結果

	アメリカ	オーストラリア	カナダ
イギリス	$p=.95$ $z=-0.53$	$p=.87$ $z=0.75$	$p<.01^*$ $z=-3.40$
アメリカ		$p=0.57$ $z=1.28$	$p<.05^*$ $z=-2.87$
オーストラリア			$p<.001^*$ $z=-4.14$

多重比較であることから、先の一般化線形混合モデルでの分析よりも統計値は厳しい値となっている。多重比較の分析で有意な差があった組み合わせは、カナダ英語 (M=66.27%) とイギリス英語 (M=57.71%, $p<.01$, $z=3.40$) 間、カナダ英語 (M=66.27%) とアメリカ英語 (M=58.90%, $p<.05$, $z=2.87$) 間、カナダ英語 (M=66.27%) とオーストラリア英語 (M=55.14%, $p<.001$, $z=4.14$) 間であり、全てにおいてカナダ英語の方が他の 3 か国の英語よりも成績が高いという結果だった。最も差が大きかったのはカナダ英語とオーストラリア英語間で、最も差が小さかったのはカナダ英語とアメリカ英語間だった。イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語の 3 か国の英語についてはどのペア同士の比較でも有意な差は見られなかった。

3-2 考察

今回の実験の結果をまとめると、カナダ英語のみが他の 3 か国の英語の成績よりも高く、

イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語の間には差がないという結果であった。カナダ英語の成績が最も良かったという結果はもとの予想と合致していたが、予想では、カナダ英語とアメリカ英語の間に成績の差を予想していなかったし、イギリス英語やオーストラリア英語がアメリカ英語と差がなかったのも予想に反した結果であった。

イギリス英語とアメリカ英語に着目すると、今回の結果は先行研究の大木&金子(2014)の結果とも合致するものであった。この研究で、被験者はアンケートにおいてアメリカ英語の方がイギリス英語より聞き取りやすいと回答しているにもかかわらず、内容理解テストにおいては両グループ間で成績の差が生じなかった。この研究では、両国の英語の成績に差が生じなかったことへの考えられる要因として、問題の難易度やイギリス英語とアメリカ英語の提示順序などが考察されていた。しかし、本実験ではそれら問題の難易度や提示順序などの問題点は、同じ問題の音声を4か国の音声で録音し、4つのリストを作成することで解消したうえで実験を行ったにもかかわらず、両国の英語間で内容理解テストの成績に差が生じなかったのは興味深い結果であった。

本実験では、カナダ英語のみが他の3か国の英語に対して内容理解テストの成績が良かった。これによりカナダ英語が日本人英語学習者にとって聞き取りやすい英語であるという可能性が示唆される。ただし、その他に、ナレーターの男女比の違いが影響を与えている可能性も考えられる。本実験では、ナレーターの男女の違いによる内容理解テストへの影響をなるべく減らすため、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語では男女のナレーターを1名ずつ採用し、問題の半数を男性のナレーターが、もう半数を女性のナレーターが録音した。しかしカナダ英語だけはナレーター確保の都合上、男性のナレーター2名となってしまった。男性の音声の方が女性の音声よりも聞き取りやすいなどの可能性を想定すると、カナダ英語のみ成績が高かったのは、カナダ英語では全ての音声を男性の音声で録音したことが原因となっているかもしれない。その可能性を検証するため、今回男女各1名ずつの音声を半数ずつ使用したイギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語の条件のみを取り出し、ナレーターの男女の差が内容理解テストの成績に影響を与えているかについても一般化線形混合モデルを用いて分析を行った。その結果、ナレーターの男女の差は、内容理解テストの成績に有意な影響を与えていないことが示された($z=-0.63$, $p=.53$)。よって、本実験で観察されたカナダ英語の成績への優位性が、ナレーターの男女差に起因している可能性は低いと結論付けることができる。

イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語の3か国の英語については、数値的には、当初の予想通りアメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語の順に成績が低くなるという結果となったが、統計的には3か国の英語の間に差が見られなかった。この点についても複数の理由が考えられ、今回の実験のデザインがこれらの差を明らかにするには適切でなかった可能性が考えられる。今回実験音声を録音してもらったナレーターは、

もともと日本向けのナレーション会社に所属しているプロのナレーターであることから、自国内で同じ英語話者同士で会話するときと比べて自国の特徴的な発音などを抑えて、外国人にも分かりやすく発音してしまう可能性は避けられない。そのような状況の中で、今回利用した TOEIC テストの Part 2 の 3 択の多肢選択問題は、発話全体の内容さえある程度理解ができてしまえば適切な選択肢を選択できる問題形式であり、被験者が各単語レベルまで正しく聞き取ることができているかを判断できる性質の問題ではなかった。この点は大木&金子(2014)でも「発音がリスニングに影響するのはテキスト化の段階であるが、多肢選択式テストでは多少の英文が聞き取れなくても、文脈からの推測によって正解できてしまう場合がある」(p.125)と指摘されている。聞き取った英文をディクテーションしてもらいような形式など別のテスト形式を利用することで、今回見られた数値的な差をよりはっきり見ることができるかもしれない。

また、今回の実験デザインは、先行研究と比べるとナレーターの個人差の影響を少なくすることを意識して作成しているが、それでもなお各国 2 名ずつのナレーターの音声を用いているので、ナレーターごとの発話の癖や聞きやすさなどの個人差は避けられない。ナレーターごとの発話の影響をより少なくするのであれば、ナレーターの数を増やしたり、もしくは各ナレーターの音声の聞き取りやすさを評定するような別課題を行ったりするなどの対策が必要であり、この点は今後の課題として残っている。

4 結論

本研究では、日本人英語学習者が英語のリスニングを行った際に、英語を話す代表的な国であるイギリス・アメリカ・オーストラリア・カナダの 4 か国の発音のバリエーションの影響があるのかどうかを調べるために、TOEIC テストの Part 2 の問題を改良させた問題を用いて実験を行った。先行研究の大木&金子(2014)の研究を踏まえて、なるべく問題の難易度による差やナレーターの個人差の影響を排除するため、4 か国各 2 名ずつのナレーターを用意し、32 問の問題すべてを各国の標準的とされる英語で録音し実験に使用した。実験は比較的短い英語の音声を流し、適切な返答を 3 択の選択肢から選択する多肢選択問題の形式で実験を行った。その結果、カナダ英語のみが他の 3 か国の英語すべてに比べて成績が良く、イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語の間には差がみられないという結果となった。イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語の 3 か国の英語では、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語の順に成績が低くなるという数値的な差は多少見られたが、この差が偶然の誤差なのか、実験のテスト形式などデザ

インによるものなのかは今後の課題として検討が必要である。ただし、今回の研究を通して、少なくとも日本人英語学習者が英語母語話者の英語を聞き取る際に、主要な英語使用国の英語同士 (Kachru (1985)の分類においてインナーサークル (Inner Circle) に分類される英語同士) であっても、その聞き取りやすさは均一ではなく差があることが示された。これは、日本人英語学習者が英語を上達させるうえで非常に重要であり、今後の英語教育研究に応用できる結果となった。

参考文献

- 大木俊英 & 金子夏実. (2014). 「日本人学習者によるイギリス英語とアメリカ英語のリスニング」. 『白鴎大学教育学部論集』, 8(1), 115-130.
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2020). 「【TOEIC L&R】公開テストは実施回によってスコアの評価基準に違いは生じないのですか?」, https://faq.iibc-global.org/faq/show/2826?back=front%2Fcategory%3Asearch&category_id=1&commit=&keyword=%E6%8E%A1%E7%82%B9&page=1&site_domain=default&site_id=1&sort=ort_adjust_value&sort_order=desc&utf8=%E2%9C%93, (閲覧日: 2021年1月25日)
- 東京外国語大学言語モジュール. (2014). 「カナダ英語の発音の特徴」. http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/en/comparison/ca_p/ (閲覧日: 2021年1月20日)
- 中谷美佐. (2004). 『ナマった英語のリスニング』. 東京: ジャパンタイムズ
- 萩寛美, エレノア・スミス, 福井美奈子, 中井達也, 倉田誠. (2019). 『An Amazing Approach to the TOEIC L&R Test』. 東京: 成美堂.
- 本名信行. (2002). 『アジア英語辞典』. 東京: 三省堂
- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of memory and language*, 59(4), 390-412.
- Educational Testing Service. (2009). 『TOEIC テスト新公式問題集 Vol.4』. 東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会・TOEIC 運営委員会.
- Educational Testing Service. (2017). 『公式 TOEIC Listening & Reading トレーニング リスニング編』. 東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会・TOEIC 運営委員会.
- Educational Testing Service. (2019). 『TOEIC テスト Listening & Reading 公式問題集 5』. 東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会・TOEIC 運営委員会.
- Jaeger, T. F. (2008). Categorical data analysis: away from ANOVAs (transformation or not) and towards logit mixed models. *Journal of Memory and Language*, 59, 434-446.
- Kachru, B. (1985). Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the outer circle. Cited in Gupta, A. 2001. Realism and imagination in the teaching of English. *World Englishes*, 20(3), 365-381.
- Melchers, G., Shaw, P., & Sundkvist, P. (2019). *World Englishes*. Routledge.
- R (2018). Package 'lsmeans'. Retrieved 2nd February 2021, from <https://cran.r-project.org/web/packages/lsmeans/lsmeans.pdf>
- Tara, S., Yanagisawa, K., & Oshima, H. (2010). The influence of foreign accent on the listening comprehension by Japanese EFL learners. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)*, 21, 121-130.

Munro, M. J., & Derwing, T. M. (1995).
United Nations. (2019). Population Division, World Population Prospects 2019, Retrieved 25th January 2021, from <https://population.un.org/wpp/>
WorldAtlas. (2018). English Speakers by County, Retrieved 25th January 2021, from <https://www.worldatlas.com/articles/english-speakers-by-country.html#:~:text=English%20Speakers%20By%20Country%201%20United%20States.%20The,largest%20number%20of%20English%20speakers.%203%20Pakistan.>